

# バンコク在住「ビルマ系ネパール人」に関する覚書<sup>1</sup>

高田 峰夫・山本 真弓

(受付 2010年11月1日)

## はじめに：研究の背景

タイの首都バンコクには民族名が付された名所が何ヶ所もある。最も有名なのは「中華街」(China town)である。ヤワラー通りを中心とする旧バンコク市街一帯には濃厚に中国系の人々の色が漂う。それに次いで有名なのは、いわゆる「インド人街」、パフラット市場であろう。パフラット通りから南側、チャカベット通り周辺からトリベット通りにかけての一角には、スィク(シク教)の寺院グルドゥワーラー<sup>2</sup>を中心に、ターバン姿が特徴的なスィクを中心とするインド系の人々が経営する店(主に服地・衣料関係)が集中する<sup>3</sup>。グルドゥワーラーの南側には以前の古いゴチャゴチャとした商店密集地を再開発してインディアン・エンポリウム(Indian Emporium)が建っており、名前の通り、そこには多数のインド系の商店が入居している。各店頭には客引きとして若者が椅子に座って人待ち顔でいるのが特徴である。筆者(高田)は、長い間、これらの若者がインド系タイ人の子孫、もしくは彼らを頼って故国から出てきた新参者、いずれにしてもいわゆる「インド人」だと思い込んできた。しかし、ある時、別の地域で偶然に、客引きをしているのがビルマから最近出てきたネパール系ビルマ人の若者、との事例を知った。そこで、まさかと思いつつ確認してみると、このエンポリウムの各商店の店頭にいる若者の大部分が、同様にビルマ系ネパール人(Burmese Nepali)

- 1 本稿では、現在の国名である「ミャンマー」ではなく、基本的に「ビルマ」と表記する。理由は、①インタビューに応じた人々は、一般的に「ネパール人」(Nepali)と自称するが、より詳しく説明する場合には「Burmese Nepali」(ビルマ系ネパール人)と称すること、②現在のビルマ(ミャンマー)政府は「ミャンマー」を主張するが、多くの非政府系組織、諸民族は未だに「ビルマ」(Burma)を好んで用いること、等による。また、上記の理由から、本稿の記述の中では「ネパール人」、「ビルマ系ネパール人」の表記が混在する。これは、彼ら自身がコンテキストにより、異なる表現、自称を用いたためである。国籍上の地位を考えれば、ビルマに居住する「ネパール系」の民族集団であり、現在では「ビルマ国籍保持者」が中心であるため、本来なら「ネパール系ビルマ人」(Nepali Burmese)とすべきであろうが、彼らの強調点は、あくまでも「ネパール人」にあるため、本稿では「ビルマ系ネパール人」とした。ただし、国籍上の地位を表す場合や、必要のある場合には「ネパール系ビルマ人」ないし「ビルマ人」の表記を用いる。
- 2 見た目の類似から、一部のガイドブックにはイスラームのモスク(モスジッド)と誤って記されている。
- 3 この地域についての詳細は、高田[2010]参照。なお、この他にも通称「アラブ人街」の「ナナー」地区が有名であるし、名称こそまだ無いものの、スクムヴィット通り周辺には事実上のコリアン・タウン、日本人街と化した両エスニック集団集中地域がある。

であると判明した<sup>4</sup>。旧知のネパール研究者（山本）にこの事実を伝えたところ、彼女にも意外であったようだ。

さっそく、バンコク在住ビルマ系ネパール人の大まかな輪郭だけでも把握してみたいと考え、筆者たち両名で聞き取りを開始した。本稿は、その中間報告である<sup>5</sup>。

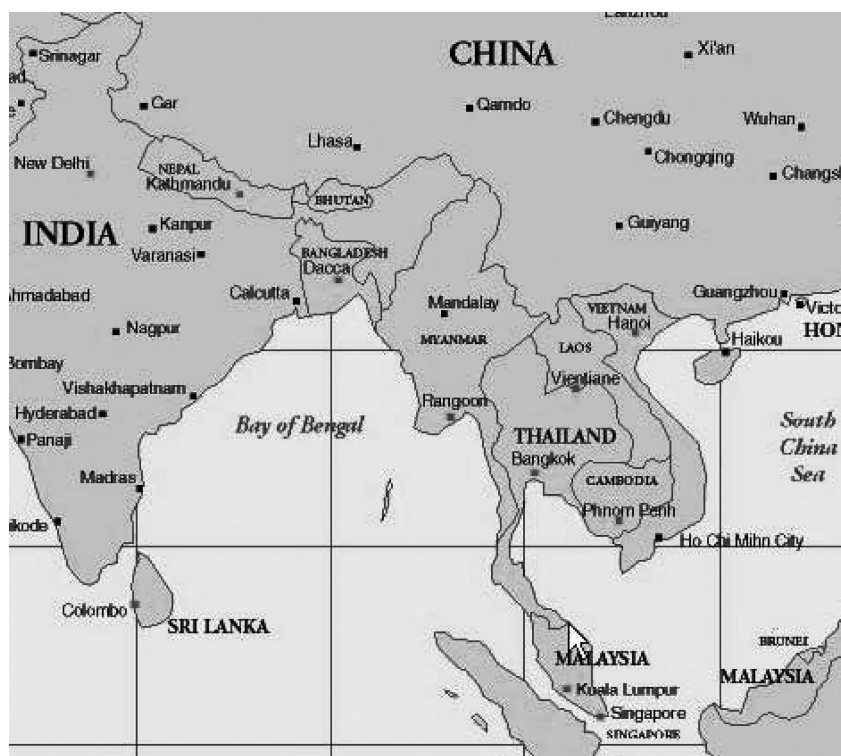


図 1. 東南アジアとネパール（出典：Contemporary Maps of World Regions）

- 4 筆者だけがこの事実を知らなかったわけではないようだ。実際、旧知のタイ人研究者に聞いても、タイ社会を研究している外国の研究者に聞いても、そのほとんどはこの事実自体を認識していないようであった。あるタイ人研究者は、筆者からこの事実を告げられ、「ビルマ人？」と言ったきり、絶句していた。彼は、何となく「南アジア系」だな、「インド人」かインド周辺の出身者だろう、と想像していたようで、ネパール系の「ビルマ人」とは全く予想外の事態であったようだ。バンコクにはインド人街以外にも、シーロム通り周辺やスクムヴィット通り周辺には「インド系」の仕立屋が多数ある。毎日のようにそれらの店先を通り過ぎているため、その店先に「インド人」青年が座っていることを誰も当然のことと受け止め、改めて疑問視することはない。しかし、まだ一部しか確認していないが、恐らくはそれらの「インド人」青年の多くも、実はネパール系の「ビルマ人」なのではないかと筆者は推測している。
- 5 聞き取りは2010年2月と9月に、筆者たち両名が共同で行った。また、一部は山本が単独で実施したものもある。以下で紹介するインタビューは、ネパール語と英語で行われた。筆者たちがインタビューをしたビルマ系ネパール人はネパール語が流暢であったが、同時に、英語でもコミュニケーションが可能であったためである。なお、本稿の基となる調査の一部には、2008年度より継続中の

## 1. 在外ネパール人の中のビルマ系ネパール人

連邦共和制を宣言したネパールのネパール人が、憲法制定もままならない長い政治的空白のときを過ごしている一方、1990年パンチャーヤト体制崩壊後急増した在外のネパール人は、国境を越えた連携を模索し確実に力を増しつつある。これは筆者の一人（山本）が2010年2月、宿泊先のバンコクのホテルでNRNA（Non Residential Nepali Association、在外ネパール人協会）タイ支部の旧役員R氏にインタビューを試みたときの印象である。R氏は、ネパールがまだ強固なパンチャーヤト体制だった1979年の反体制運動を経験せずにネパール国外に出た在外ネパール人で、タイ人女性と結婚している。しかし、現在でもネパール国籍を保持するタイ定住ビジネスマンである。NRNAを通じた彼のネットワークは、アメリカ、ロシア、ヨーロッパ、アフリカ、日本と、世界中に広がっていた<sup>6</sup>。

他方、その前日に「インド人街」のシック教寺院（グルドゥワラー）周辺地区、特にインディアン・エムポリアムの中で、ネパール語で言葉を交わしたネパール人の若者は、R氏とは異なる印象をもたらしていた。しばらくして気付いたのだが、同地区で働くネパール人の若者は、ネパール語を十分に理解しないタイ生まれのネパール人で、両親もしくは祖父母がビルマ（ミャンマー）からタイに移動してきたビルマ系ネパール人だった。そもそも、タイのネパール人社会では、R氏のようにネパールから直接タイへ来て定住している人々は少数派で、むしろビルマ系ネパール人の方が多いようである。

では、ビルマ系ネパール人とは、どういった人々を指すのか。R氏の紹介で、その日のうちにビルマ系ネパール人のS氏の店を訪れることができた。また、翌日（日曜日）にはS氏の家族（母親と二人の娘たち）と一緒に、バンコク郊外の住宅街にあるシャンティ・パワンというネパール系仏教寺院を訪れ、ビルマ系ネパール人の礼拝に出席した。ネパール在住でタイとネパールを行き来しているネワール<sup>7</sup>の僧侶1名と、ネパールからタイの大学に留学中のネパール人僧侶2名による説法を拝聴し、そのあと全員で昼食<sup>8</sup>をとり、順番にお布施を行った。集まったビルマ系ネパール人の多くは、その容貌（と名まえ）から、ネパールの山の民族（仏教徒）だと思われたが、なかにはその名前から明らかにヒンドゥーの高カース

6 文部科学省科学研究費、基盤研究C「南アジア周縁地域から日本への人的移動とネットワーク形成」（代表：山本真弓、2010年度後半のみ高田峰夫）を利用した。また、予備的調査は、高田が広島修道大学から許可を得て2009年9月から2010年3月までの半年間、タイのチュラーロンコーン大学で在外研究期間を得た中で実施した。両機関の支援に感謝する。

6 NRNAについては山本が別の機会に発表する予定である。

7 ネパールの主要民族名の一つで、コミュニティとしてはヒンドゥー教徒のネワールと仏教徒のネワールがある。いずれも内部がカースト・システムを抱えている。

8 ネパール食が中心。

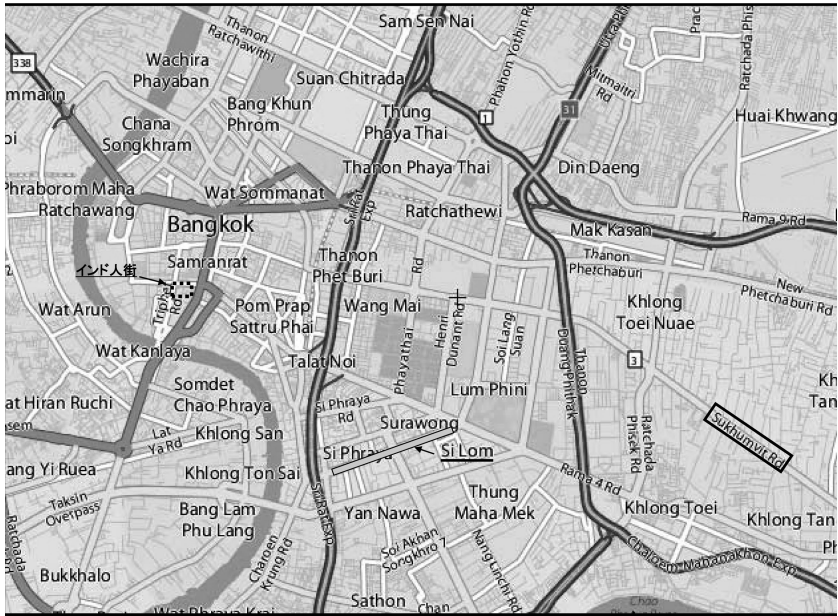


図 2. バンコク主要部と関連地名 (出典: Yahoo! Local Maps に筆者が加工)

トであるバウン・チェトリ<sup>9</sup>とわかる人々もいた。

また、ネパール語が苦手なビルマ系ネパール人の子供のために、週に一回ネパール語を教えているネパール人の若者もいた。彼はネパールからバンコクへ職を求めてきて、タイで結婚し、ネパール人コミュニティでネパール語を教えるようになったようだ。彼のネパール語はカトマンズのバウンが話すネパール語<sup>10</sup>で、「こっちのネパール人の言うことがわからないことがある」と、カトマンズのバウンのネパール語で早口で語る。ジェスチャーもカトマンズのネパール人のものだ。

ビジネスで成功している S 氏の店は、スクムヴィット通りのアソーク交差点に程近い場所に何軒か仕立屋が並ぶ中の 1 軒である。店には、様々なネパール人が集まる。2010年 9 月、われわれは S 氏の店の 2 階で、S 氏および S 氏の店で働く B 氏からビルマ系ネパール人がタイに来た経緯について、簡単に教えてもらった。なお、B 氏はネパールから職を求めてタイに来たネパール人で、ビルマ系ネパール人ではない。

9 ネパールのカースト・システムで最上層とされる「バウン」(=ブラフマン) およびその次の「チェトリ」(=クシャトリア) を合わせて「バウン・チェトリ」と呼ぶことが多い。これは、ネパールではこれら両者が支配カーストとして長年政治的社会的に最上位に君臨してきたためである。

10 ネパール語はネパール以外にインドのダージリン地方やブータンなどでも使用されているが、それらは、カトマンズ盆地のバウン・チェトリが用いるネパール語が簡略化されたものだったり、ヒンディー語などの影響を受けたものである。バンコクのビルマ系ネパール人が話すネパール語もそういった「やさしい」ネパール語だった。



## 2. B 氏 の 話<sup>11</sup>

ビルマのネパール人の歴史というと、今からおよそ80年ほど前にネパールからビルマへイギリスの軍によって連れて来られたのが始まりだ。第二次世界大戦下のことだった。イギリスが（ネパール人を）連れて行ったのは、ビルマだけじゃない、インドとか、各方面へだ。ほとんどが男だったが、女もほんの少しいた。ゴルカ兵<sup>12</sup>の家族だ。

戦争が終わると、ネパール人の多くは、ビルマの気候風土が気に入ったことや、なによりも、すでに長年にわたってビルマに住んでいたため、ネパールに戻らずにビルマにいることにした。ビルマ政府はそういうネパール人をビルマ軍の兵士に採用することもあった。

それから、戦争中、（彼らとは別に）ビルマ軍の兵士として戦ったネパール人もいて、彼らは戦後ネパールに帰ってからも、ビルマ系ネパール人というふうに言われている。今から30年くらい前までは、ビルマからネパールに帰るビルマ系ネパール人ってのがいたんだ。だから、ネパールにはビルマ系ネパール人のコミュニティがある。

ネパールにあるビルマ系ネパール人コミュニティには、法的に2通りのグループがある。ネパールの ID（直接的には身分証明書だが、市民権か？）をネパール政府から取得している者たちと、ID は取得せずにいる者たちだ。後者は、ビルマのグリーンカード（永住権）もっている。

このほかに、ビルマからネパールに帰ったものの、またビルマに舞い戻ってきた連中がいる。彼らはビルマとタイの国境地域のタイ側に住むようになった。今から60年ほど前の話だ。彼らは無国籍だった。場所は、ビルマ南部のタヴォイから東にタイに向かい、タイ側に入っすぐ近くだ。ピロックという所だ。

当時、タイのビルマとの（その一帯の）国境地域は森林地帯だったけれども、後にタイの統治がこの地に及ぶと、タイ政府は調査をしてネパール人がたくさんいること、彼らにはどの国の国籍もないことを知った。それで、タイのグリーンカードを与えることにした。つまり、60年前からタイにはネパール人のコミュニティがあるということだ。

（ビルマからバンコクに来たルートについて質問すると、ビルマから、ピロック、カンチャナブリを通してまっすぐバンコクに入ることがわかった。ピロックはカンチャナブリに隣接

11 以下は、基本的に聞き書きを文字に起した形で記述する。聞き書きは、ある程度の整除をすることと、重複を削る以外は、基本的に聞いたままを記し、そこに注記で解説を施す形式を取っている。なお、カッコ内は筆者たちによる補筆である。

12 「ゴルカ兵」とは、インドを支配していたイギリスが大英インド帝国の隣国で独立王国だったネパールから、イギリス軍の傭兵として集めたネパール人の兵士。ネパールの山の民族を中心に構成されていた。



図 3. 東南アジア関連地域図 (出典：Google Map に筆者が加工)

するビルマとの国境地域であり、主要道路のない山の中である。)

当時はビルマとタイの国境沿いは自由に行き来できた。この地域は少数民族のモン (Mon) 人の地域で、モンの政府が支配していた。モンはビルマ政府と対立していたから、(その地域にいたネパール人は) 自由に行き来できた。

ここにはビルマ政府の支配も及ばず、モン人とネパール人が一緒に暮らしていた。この国境地帯のネパール人の存在をタイ政府が知ったとき、彼らはビルマ語を少し話したけどビルマ人じゃないってことで、タイのグリーンカードが交付された。30年ほど前のことだ。それから、(今から) 3～4年ほど前にはタイの国籍が認められた。だから、今ではタイ人だよ。その後、タイで生まれた者は(タイは、タイ生まれの者に国籍を付与する生地主義を取っている)ので自動的にタイ人になる。だから、国籍を書くときには「タイ」って書く。「ネパール」ってのは、どこにも表れない。

一世はネパール語を話すし、タイ語も話す。二世はネパール語とタイ語が半々かな。三世

になると、9割方タイ語。ネパール語は1割程度。

(シャンティ・バワンの話になる。ヒンドゥーのネパール人はどうしているのかと問う)

タイは仏教国で、ここにはタイ・ネパール仏教徒協会ってのがあんだけど、ヒンドゥー寺院もある。ぼくらはネパール人で、仏教かヒンドゥー教か、その違いにはこだわらない。みんな、ネパール人で文化的には一緒だ。誰の家にも、シヴァ神とブッダが祭ってある。



S氏の店舗奥。左に仏像を祭った祭壇、右にシヴァ神と女神を並べて祭った祭壇が並ぶ。

### 3. S 氏 の 話

わたしの母親は現在、ビルマにいる。わたしはビルマ生まれで、タイに来て22年になる。今39歳だから、来たのは17才の時だ。職を求めて、車で来た。もっとも、小さい頃からビルマとタイのあいだを行ったり来たりはしていた。ビルマには母親だけでなく、親戚も友達もいる。(2月に筆者はS氏の母親に会っているので、その点について質すと)母親はこのあいだビルマからバンコクに来ていたんだ、わたしたち家族に会いに。

わたしはタイのビルマ系ネパール人のなかでは、第一世代じゃない。だけど、タイに来てずいぶん長い。祖父母がネパールからビルマに来た最初の世代だ。両親もわたしもビルマのシャン州で生まれた。

教育はビルマ語で受けたので、ビルマ語は不自由なく話せるし、読み書きもできる。タイ語はまあまあだね。

祖父がネパールからどうやって来たかは、よく知らない。もう亡くなっているし。でも祖母は健在で、聞くところによると、ビルマで祖父に出会って結婚したらしい。祖父はたぶんゴルカ兵だったと思う。

わたしみたいにしてビルマからタイに来ているネパール人はたくさんいる。ビルマでは仕

事をするのが大変だし、それから、ビルマ政府がカレン人やモン人と対立しているから。政府と少数民族の紛争が生じると、ネパール人はタイ側に逃げてくる。非合法だけど、国境を越えてくるんだ。そんなふうにしてタイ側に逃げてきたネパール系ビルマ人が、ビルマ側に帰れなくなって、だんだん人口も増えてきた。それで、タイ政府はそういった人々にも、当初、その地域に住めるグリーンカードを発行した。その後、国籍も認めるようになったんだ。わたしもタイ国籍を取得したら、ビルマに帰って住むことはたぶんできないだろう。今、(タイ国籍を)申請しているところだが。

どうやって、タイに來たかって？ ちょっと言いにくいな。車とバスでだ。非合法だよ。

わたしたちはシャン州に住んでいたけど、ネパール人はビルマ中にいるよ。ビルマ軍の中にもいる。今もいる。タイのネパール人はタイ人だけど、ビルマでは、ネパール人はネパール人。あるいはゴルカ。区別する。ビルマ人とは言わない。みんな、そう。カチンはカチン。インドはインド。そんな具合だ。言葉は各々の言葉(を話す)。でも(学校で)学ぶのはビルマ語だ。

村にはネパール人の学校があって、政治活動をしないようにしながら教える。それから、ネパールの文化(サンスクリッティ)、宗教(ダルマ)、言葉(バーシャ)を忘れないために、ビルマの学校が休みの3カ月間はネパールの(=ネパール人が運営する?)学校に行く。ネパール語を話して、ネパールの歌を歌って、ネパールの文化慣習に従う。そんなふうにして育った。

父親は4年ぐらい前に亡くなった。母親はときどきタイに来る。妻はここで生まれた。タイ生まれのネパール系ビルマ人。(私たちは)ここで出会って結婚したんだ。

ネパール人は仏教徒もヒンドゥー教徒も同じ文化、同じダルマ。だから、ひとつの協会に組織されていて、その下で仏教徒の協会や、ヒンドゥーの協会もある。ヒンドゥー寺院はタイには5つある。バンコク、プーケット、コ・サムイ、ホアヒン、パタヤに小さいのがある<sup>13</sup>。仏教寺院はいっぱいある。

タイにネパール人がどうやって來たかって？ ほとんどが非合法だよ。非合法にきて、サッタヒクワルシャ<sup>14</sup>に(タイ政府が)パスポートを交付した。Allowance worker(法的に労働を認められた者)としてね。それで、合法化されたような形になっている。そのほかには、ネパールから直接バンコクに仕事にやってきたネパール人がいる。ネパールのパスポートで。合法的に、だ。最後に、60年前からここに住んでいるネパール人<sup>15</sup>。

13 ここで述べているのは、あくまで「ネパール系ビルマ人ヒンドゥー教徒」の集う「ヒンドゥー寺院」の意味であろう。筆者(高田)が実見した範囲でも、チェンマイには立派なヒンドゥー寺院があったが、ここでは触れられていない。

14 この部分、不明。

15 つまり、一般に「ネパール人」と総称されているが、実は、タイには大きく分けて3つのカテゴリー



タイにはネパール人コミュニティってのがあって、そのなかでも一番古いのは、最後のグループだ（＝第二次大戦直後にタイ側に流入定着した人々）。このグループはタイ国籍を取得しているのだから、タイ人だ。1500人ほどいる。医者とかエンジニアとかの職業にも就いている。

仕事を求めて（ビルマから）合法的に来ているネパール人は、さあ、1000人ぐらいか。非合法なのは、4～5000人ぐらいかな？ ネパールからネパールのパスポートで来ているのは、4～500人。全部で6～7000人ぐらいか？ いや、バンコクだけで3万人ぐらいだ。タイ全国では5万に達するかな？<sup>16</sup>

（ビルマ北部、カチン州の州都ミッチナー [Mytkyina] について質問する。インディアン・エンポリウムで出会った店頭の若者たちのほとんどが、自分はミッチナーから来た、と語っていたからだ）。

ネパール人が最初に（ビルマから）タイに来たのは、ミッチナーからだ。どうしてかっていうと、この地域はカチン政府の支配下にあつて、ビルマ政府と対立して自分の軍をもっている。だから、息子が3人いたら、2人は兵にとってしまう。無理やりだ。逆らったら、殴られたり殺されたりするから、逃げてくるんだよ、タイに。

（グルドゥワーラーの横のインディアン・エンポリウムで出会ったネパール人少年について、ネパール語があまり理解できてないみたいだという話のなかで）

若い世代のネパール人はネパール語があまりできない。ネパール語で話しても、ビルマ語で返してくる。彼らのネパール語はぼくらのネパール語とはちょっと違う。ビルマ語とネパール語を混ぜて使う。ネパール語の単語をよく知らないんだよ<sup>17</sup>。

ミッチナーから来たネパール人なら、（バンコクに）たくさんいる。（と言って、その場でG氏に電話をしてくれる）。

G氏はバンコク中心部のコンピューター専門店が多数入居することで有名な商業ビル「パンティップ・プラザ」の中にコンピューター部品を扱う店舗を構えていた。筆者のひとりとは2月にシャンティ・バワンで一緒だったため、互いに顔を覚えていた。

\\ の人々がいることになる。①第二次大戦直後にビルマ経由でタイ側に流入・定着したネパール人。②ビルマに定着したネパール人の子孫で、比較的最近タイに流入してきた、いわばビルマ系ネパール人。③ネパール本国から直接、ごく最近になって来るようになったネパール人。

16 最初の方の数字は全く自信がなく、適当に言っている感じがありあつた。他方、後者の数字（「バンコクだけで3万人」から）は、横からB氏や別の同席者も口を挟んで合意していた数字だから、こちらの方が実態に近いようだ。

17 バンコクのネパール人は、父親、母親を指示するのにヒンディー語の単語を使う。そのほか、「忘れる」という動詞もヒンディー語の動詞、「しかし」の接続詞もヒンディー語（「レーキン」）、といった具合に、本人たちの意識には上っていないが、ヒンディー語の単語が混じっている。本人たちの意識の上っているのは、ビルマ語の影響のみ。また、わたしたちに対する二人称の敬語（ハジュール）は、B氏（ネパールから来たネパール人）のみが使用。

#### 4. G 氏 の 話

ここには弟と妻がいる。ビルマの大学で学位をとってからタイに来た。どうしてかっていうと、ビルマは政治に問題があるし、こっちに友達もいるから。バンコクやプーケットはいいところだという話も聞いていた。20年、いや、20～25年くらいになるかなあ、ここに来て。父親も母親も向こうだ。ここはビルマみたいに厳しくないから、仕事もやりやすい。

3～5年前、生まれて初めてネパールに旅行で行った。それまで一度もネパールを見たことがなかった。ビルマのパスポートで行ったんだ。タイのグリーンカードももっている。こっちに住んで20～25年にもなると、タイ政府はグリーンカードをくれる。タイの ID（身分証明書）だ。でなければ、パスポート（ビルマ）がある。ただ、パスポートでここに住むとなるとビザをとらなきゃならない。税金のこともある。まあ、いいさ。小さくても、店がある。10～15年になるよ、この店を始めて。

タイのグリーンカードをもっているけど、ビルマに帰れる。1年に1回は帰るよ。母親は亡くなった。ミッチナーにはネパール人がいっぱいいる。だって、土地が豊かだから。雨もたくさん降るから、農業に適しているし、牛も飼う。いいところだ。だから、ネパールからたくさんミッチナーに来た。

バンコクには、弟と甥っ子（妹の息子や兄の息子）が来てる。ミッチナーから、合法的にさ。（彼らは）1週間のうち、4日は勉強して、3日は仕事する。エーベック大学<sup>18</sup>で学んでいる。

今は良いよ。ネパール人の組織もできている。12日、おいでよ。ティージュの祭り<sup>19</sup>があるよ（と筆者たちを誘ってくれる。11日に帰るから無理だということ）残念だなあ。いろんな人に会えたのに。

1万人ぐらいいはいる。ミッチナーからタイに来たネパール人だよ。半分はバンコクに集中している。ミッチナーにいるネパール人は20万人くらい。ビルマにはラングーンとか、いろんな州があるけど、ミッチナーは「第2のネパール」だよ。自分がネパールのどこから来たかは、わからない。だって、第3世代だから、ぼくらは。誰も知らないよ、お祖父さんや曾お祖父さんがどこから来たかなんて。

ミッチナーのネパール人でバンコクに来て、若干の富を築いた者は、ネパールに行くよう

18 ABAC (Assumption Business Administration College, アサンプション経営学カレッジ), 現在の「アサンプション大学」のことか。

19 「ティージュの祭り」とは、女神パールヴァティーの嫁入りを再現する祭り。本来は、雨季に入る時期に行われる予祝農耕儀礼の一種 [関根1992]。

になった。子供たちを勉強にインドにも行かせる。ダーズリンとかにね。ネパール人として。ネパール語を話したり、読み書きも学ぶ。(子供たちはネパール語の読み書きや会話ができないからね、あまり。

どうして、(お祖父さんたちが)ネパールからミッチナーに来たかって？ 話せば長いことになる。ゴルカ兵として来たんだ。祖父さんも、曾祖父さんも。(初めは)インドに行って、インドから(イギリス軍のゴルカ兵として)ビルマに来た。戦争が終わったら、帰った者もいるし、ビルマに残った者もいる。ビルマは土地が豊かだったから、1000人ぐらいかなあ、残って農業をしたよ。そこで世代を紡いでいってね。

そのうち、ネパール人がたくさん住んでいることにビルマ政府は気付いた。ネパール人は政治的じゃないし、純粹だし、これは良いつてことになって、ビルマのID(この場合は国籍?)をくれた。ネ・ウィン<sup>20</sup>の頃。それからビルマ軍にゴルカ兵を入れた。ゴルカ兵だけね。カチンとかはだめだ。でも、ゴルカはナショナリティじゃない<sup>21</sup>。

ビルマにはネパール人社会がある。今は第4世代になっている。ビルマも悪くはないけど、みんな外国に行きたがっている。ま、ちょっと長い話になる。

わたしの父親も軍に所属していた。ゴルカ兵じゃないよ、ビルマ軍だ。もうすぐ選挙がある。投票はできるけど、政治行動は今だめだ。しちゃいけないね。今は。

ビルマ生まれはビルマ国籍だ<sup>22</sup>。タイと同じ。わたしの父はビルマ生まれのビルマ人だ。

ミッチナーは大きい街だよ。100~200万人はいるね、そのうち、20万人はネパール人。わたしが学んだのは、ビルマの大学だ<sup>23</sup>。地理学を学んだ。ITじゃない。

(非常に若々しい様子なので、若く見えるね、というと)48歳だよ。(若々しいのは)ここじゃあ、それほど苦労はないからだよ。

4人兄弟で、2人はすでに亡くなってる。姉妹は3人。1人は亡くなった。今では私が一番年長だよ。弟も一緒にビジネスしている。

(タイではネパール人でも仏教徒が多いのはなぜか、また、なぜ皆[カースト等を超えて]良い関係を保っているのか、質す)。ビルマにいる間に、仏教になじみ、皆、仏教徒になったんだ。仏教の教えは、妬まず、欲張らず、助け合う、というものだ。だから、タイに来て

20 Ne Win, ビルマ(現ミャンマー)第4代大統領、独立の志士の1人で、ビルマ式社会主義を提唱。独裁者として非難を受けた。大統領在任は1962年から1981年だが、恐らく、ここで「ネ・ウィンの頃」とは1960年代ではないか。

21 この部分、やや意味不明。「ネパール」のような「国籍」ないし特定の「民族」範疇ではない、との意味か。

22 出生地主義によって自動的にビルマ国籍が付与される、との意味らしい。ただし、実際にはそれほど単純でないことは、齊藤[2007; 2008]を見れば明らかである。

23 カチン州に所在する大学で彼の発音に近いのは“Bhamo University”であるが、細かく確認することは出来なかった。

も、ネパール人同士、仏教の祭りには集まって、皆で祝い、お互いにも助け合う。元々が仏教徒だったわけじゃないよ。ネパールからビルマに来て、それで仏教徒になったんだ。もちろん、皆が皆、助け合っているわけではない。(最近)ネパールから来た人たち(=新来のネパール人)は自分のことしか考えない。集会でも、話をする番になると、自分のことばかり話す。散々自分の好きなように話しをして、話し終えたら、もう他の人の話なんか聞かない。困ったことだがね。タイの人(=第二次大戦直後の頃にビルマ経由でタイへ流入したネパール系タイ人)もそうだ。ビルマから来た私たち(=ビルマ系ネパール人)のことを良く言わなかった。タイでは自分たちが上だ、って私たちを見下していた。でも、今は違う。私たちに力がある。経済的な力を持つようになった。(集まることで、ネパール系の人々の中での数を基にした)政治的な力も持っている。高等教育を受けた人も多くなった。それに私たちはお互いに助け合うからね<sup>24</sup>。

ミッチナーからどうやって来たかって？ ルート？ たくさんあるよ、ルートは。ミッチナーからラングーンには(陸路で)2日かかる。ここでパスポートを得る、それから飛ぶ。でも、20年くらい前はとても簡単だったよ。ビルマの通貨は高く、タイの通貨は安かったから。今は、(ビルマ側から来るのは経済的に)ちょっと大変。でも、ラングーンを通らなければ、バンコクに来るのはすぐだよ。ミッチナーから雲南に抜けて、そこから飛行機でバンコクに飛ぶんだ<sup>25</sup>。国境まで2時間もかからない。中国側は道が良いからね。ハイウェイだ。その日のうちにバンコクに着くんだよ。早いし楽だし便利だ。

わたしはタマン<sup>26</sup>だよ、だから顔が(タイ人に)似ている。尋ねられれば、「タイ人じゃないよ」っていうけどね。ミッチナーでわたしみたいな顔は少ない。8~9割は、インド人みたいな顔をしてるよ、ミッチナーのネパール人は。

結婚して5年目だ。40歳過ぎてから結婚した。ビルマのネパール人社会をあちこち回って、嫁さん候補を探した。気に入る女性を求めてね。だから出会ったのは、ビルマでだよ。妻は大学を卒業して、メイミョ(Maymyo)で小学校の先生をしていた。

妻も店をやってる。宝石店。小さな小さな店だよ。まだ、始めたばかりで様子見をしているところだ。2~3カ月になる。モゴ<sup>27</sup>を知ってる？ ミッチナーのモゴ。ルビーで有名だ

24 ここでは図らずも、ネパール系の3つのグループの間で微妙な関係があること、ビルマ系ネパール人の人々の間では、ビルマで信仰を始めた(深めた?)仏教が、彼らに特有の社会的態度とお互いの間での特別な紐帯をもたらししていることが、明らかにされている。

25 ミッチナーから中国の雲南省までのルートはいくつかあるが、可能性が高いのは瑞麗に抜けるルートか、保山に抜けるルートであろう。詳細は確認できなかった。

26 ネパールの山岳系少数民族の一つで、モンゴロイド的要素が強い。彼の容貌は、いわゆる「ネパール人」とは全く異なっていた。

27 Mogok, ミッチナー北東部に位置する小都市で、宝石の産地として有名。カタカナ表記では「モゴク」とされるが、彼の発音は、ほとんど「モゴ」だったため、そのまま記している。



よ。(彼女は)そこでも先生をしていたから、宝石のことを知っているんだ。

## 5. G氏の妻の話<sup>28</sup>

ここには色んな人がいるわ。(と言って、典型的なインド系の顔立ちをした若い女性を近くのブースから連れてきた)。彼女もネパール人<sup>29</sup>。(売り手として店を出している中には)中国人も韓国人もいる。

最初は2階のショールの店で販売員を一年ほどして、その後、自分で土産物屋を地階に出したの。そのときの伝手で、1階に宝石店を出すようになった。地階はほとんど売上がないから。宝石店を始めたきっかけは、一番客が入る1階に場所を得たから。(横の女性を指し示し、彼女にスペースを)半分分けてもらった。1階はみんな宝石店。だから自分も宝石店を始めることにしたの。一つの区画の場所代は月に5000バーツ。利益はほとんどないけど、家にいても退屈だから。夫は宝石を扱うことについては反対している。(だから、開店以来、一度もここを訪れたことがない、と後で話していた)。でも、わたしがハッピーならそれでいいと言ってる。

モゴにいたから、何となく宝石(の良し悪し)が分かるだけで、(本当のところ)宝石の質は分からない。だから、あんまり安かったりしてちょっと変なのは、上の(=同ビルの上層階にある)鑑定所で見てもらうの。鑑定をして、(本物だったら)鑑定書を出してくれる。



シーロム通りのショッピング・センター奥にあるG氏の妻の店。  
右手前のケース1つ分が1ブース。

28 彼女とは、バンコクのビジネス街であるシーロム通りにあるショッピング・センター内の彼女の店で話をした。

29 その後、一頻り雑談になった。宝石の商売の話しや、そこにいる人々の話。本稿の話の筋とはさほど関連しないため、全て省略。

(その場に、手に宝石を持った行商人が売り込みにやって来たので、彼らから宝石を買い付けるのか、と尋ねてみた。すると)、買い付けはここではしないわ。売りに来るけど。買い付けにはチャントブリ (バンコク北郊の町) にある卸売 (の市場?) に行く。

## 6. お わ り に

本稿では、これまでその存在自体が認知されていなかったビルマ系ネパール人に光を当て、彼ら自身の言葉によって彼らの社会と歴史を語ってもらった。その結果、ネパールとビルマ (ミャンマー) とタイの意外な結びつき、複雑な歴史的背景、彼らの中での微妙な集団間関係等を浮かび上がらせることができたのは収穫であった。しかし、彼らが現在のタイ社会で暮らすようになるまでには、少なくとも英領インド時代、もしくは英領ビルマ時代に遡る歴史的背景と、ネパールからタイに至る広大な地理的領域とが関わっている。また、タイ社会における彼らの位置づけも明らかになったとは言い難い。調査はまだ緒に着いたばかりである。今後、より幅広い聞き取りを行うことで、様々な疑問を解決してゆきたい。そして、可能であるならば、彼らにその一部でも還元してゆきたい、とも願うものである。

## 参 考 文 献

- 齊藤紋子, 2007, 「ビルマにおけるムスリム住民に対する見えざる「政策」—国民登録証にまつわる問題—」『言語・地域文化研究』(東京外国語大学) 13, pp.1-16。
- , 2008, 「「バマームスリム」という生き方—ビルマ政府の国民概念とムスリム住民の生存戦略—」東京外国語大学提出博士論文和文要旨, 東京外国語大学。  
(<http://www.tufs.ac.jp/common/is/kyoumu/pg/pdf/saito-ayako-shi-youshi.pdf>)
- 関根康正, 1992, 「民間信仰」, 辛島昇他編『南アジアを知る辞典』平凡社, pp.716-718。
- 高田峰夫, 2010, 「バンコクのバングラデシュ人社会についての予備的考察—タイ社会の変化とグローバル化の中で—」『広島修大論集』51-1, pp.171-195。

## Summary

### An Essay on the “Burmese Nepalis” in Bangkok, Thailand

Mineo TAKADA and Mayumi YAMAMOTO

This paper is focused on the Burmese Nepalis in Bangkok for three reasons. First of all, the Nepali ethnic community in Thailand has not been recognized yet until one of the present authors discovered it.

Needless to say, there are several South Asian ethnic communities in Bangkok besides the Chinese community forming the famous China town. On the south side of Gurduwara (Sikh temple), we can find an Indian Emporium which provides lots of Indian foods and items. It has been regarded that the people working around this area are of Indian origin, but in reality, quite a lot of them are Nepalis.

Secondly and related to this, it has become clear that the majority of Nepalis in Bangkok are from Burma (Myanmar), not from Nepal.

It is known that there have been Nepali communities in Burma since the colonial period. On the other hand, more and more Nepalis are going to emigrate, and Bangkok is sure to be one of their destinations on the wave of so called globalization in general, and in particular under the pressure of the deteriorating political situation in Nepal. The former are called ‘Burmese Nepalis’ and the latter is recognized as Nepali diasporas or Non Residential Nepalis (NRN). Both are people of Nepali origin. However, Burmese Nepalis have their own history which involves not only Nepal and Burma, but also the British India in the past and Thailand after the liberation of Burma.

Thirdly, and the most important reason is, that the Burmese Nepalis are recognized not as ‘Burmese’ or ‘from Burma’, but simply as ‘Nepalis’, ‘a sort of Indian’, or ‘from South Asia’. Therefore, by focusing on them not only as people of Nepali origin but also as Nepali from Burma in Thailand, it might be possible to acquire a different framework of Asian regional studies rather than the divisive one of “South Asia” and “Southeast Asia”. This will promote to reconsider the relations between these areas.

Regarding the terminology used in this paper, the words ‘Burmese Nepali’ are used by the people with whom we conducted the interview. They call themselves ‘Burmese Nepalis’

irrespective of their citizenship or nationality. Most of them seem to be Burmese passport holders. Among them, some have the permanent residency (what they call as a green card) issued by the Thai government, and the others are only permitted to stay in Thailand for work (what they call as an “allowance worker”).

Those Nepalis who were born in Thailand are Thai nationals by birth since the Thai nationality law is based on the *jus soli* principle. Therefore, they may be called ‘Nepali Thai’, according to the legal status. However, they categorize themselves as ‘Burmese Nepali’ if their ancestors came from Nepal via Burma.

In addition, there are also the people who cross the Thai-Burmese border without permission. They may be called illegal migrants.

Hence, as far as legal status is concerned, a variety of ‘Burmese Nepalis’ are observed, but it seems that there is no strict distinction among them from the viewpoint of their own community.

Further, there are tentative relations between ‘Burmese Nepalis’ and other Nepalis in Thailand, i.e. Nepalis from Nepal who are Nepali nationals. This indicates that the Nepali community in Thailand tends to include, to some extent, all residents with Nepali origin.

In this paper, the results from the interviews are shown exactly as they actually told us either in Nepali or in English. Our interviews began with the history of Burmese Nepalis (how and when they came to Burma, in which way they survive after the liberation of Burma and during the political unrest) and then moved to their present situation in Bangkok. In between, it was also mentioned by which route they entered Thailand.

This paper will be followed by a more detailed and in-depth study based on the interviews, which will become a part of the comprehensive study on South Asian immigrants in Thailand.